

失敗せる改良竈

白山生

久しく尋ねなかつた友の新妻との新世帯を麴町に訪ふた。理想の妻を得た主人公のいつもにこゝとして居たのに引かへ、今日は何となく眉のあたり八の字のあと見ゆるさえない思議なのに、よく笑ふ妻君の聲も聞えず顔も見えずやれ〜之では折角汗水垂して訪問したかひもなかつた。やはり之は獨身どうしのうちかなどと考へながら、無さたの挨拶もそこ〜どうやら氣になるので

「君けふはかげんでも悪いのか」

「なにどこもどうもないが」

苦笑して曖味の答

「まさか仲が好過ぎてのでもあるまいが」

とそこへ妻君が茶道具片手に

「どうも失禮いたしました久々の御出に御茶も早速差上られずすみませんでしたおへつつひの悪

い爲火種もとれず御湯もなしでついまこ〜致しましたの」

と云ひ乍ら主人公の顔を斜に見つめて

飛入の自分には一向に要領を得ないが兎に角何か事件があつたらしい。それとも御自分の不手際をへつついになすりつけてか、それにしては主人公の苦笑、妻君の目つき、さて面沃な、一層短刀直入にと

「奥さんおへつついが云ふ事を聞かないのですか大分おもしろそうな、御話らしいですが御伽話の種に一つ伺はして戴きたいものです」

と云ふか云はぬに

「どうかそう御ひやかしになりませんで」

と笑にまぎらすを元々親しき友の間とて主人公今は云はではと觀念せしものか

「イヤ飛んだ失策をしたのだまわ君聞いてくれ給へ實はこゝへ引うつる時今迄のが安物で間に合せてあつただからと一つ奮發している〜見

末まこれなら必ずよからうと獨りぎめで神田橋電車停留所傍の山石商店の改良竈と云ふのをかつたのだそして其引こした夕方すぐ燃して見た處一向に燃えない臺所博士の號を送つてい、程の年寄がしてもだめであつたが、兎に角其日は新らしいので慣れない爲だらうと先づ皆がこれで骨折損もこぼさずに濟んだか、二度が三度となり四度となつても一向に燃えない。飯はぐちやぐちに出來る、今迄二十分もかゝればはつて置いても沸騰たつたものが三十分付さりで漸くと云ふ始末、下女には好く行ず妻がけひい思して汗流てやつてもしまいいにはぢれてしまふ。どれ自分でも僕がいる、理學作用を應用し風穴を大きくして見たり小さくして見たりするが矢張りだめ。とうとう竈が不完全と結着した。そこで山石商店へ談判して此通りだから引取れと云つたがいろ／＼理屈をつけて引取らない。そこで毎日／＼竈で難儀して居るのだ。元々妻は

体裁はどうでも燃えさへすればいいのだから今迄通りの安物で澤山だといつたのを僕がなんでもと云ひ張つて買った處が此始末さ。それで御飯はまづい時間はひだと云ふので、毎朝大こぼしなのが丁度一週間になる。今も朝飯漸く濟したが誰も手を出さないから僕がつきさりで飯焚き男になつたのだ、馬鹿／＼しくて腹も立つがしくじつたので困つて居る處なのさ」

聞いて見れば氣の毒でもあり可笑しくもあるが兎に角山石商店たる商人の不徳にくらしく「そりや君大難儀だらふ其商店どし／＼攻撃してやり給へ、そんな實用に適しない物を賣つてでまかさうとするのは實際体のい、詐僞だね」

「おや／＼御話にき、とれて折角のお茶を水にしてしまつたけれどどうつかり御熱いのを願つて火焚を申付つては大變奥さんなまぬるでよございますからどうか」

と云へは一座笑ひ出して主人公の八の字もうすら

ぎ妻君の目もにらますなつた。

やがて辭し去らふとすると妻君

「まわ久々での御出御ゆるりとなさつて下さいませ

し理學者の焚いたごはんも一度は召し上つて御

覽下さい奥さんへの御土産話しにどうか」

主人も共々

「まわ久々だいなぢやないか竈も實驗して見てく

れ給へどうにかなるまいかしら、ねえお静釜を

少し持ち上げた方がよく燃えたね」

妻君ツンとして

「私理屈はどうか存じませせん宅では近頃理學者を

ごはんたきに一人頼みましたからもう安心して

居りますの」

主人公閉口して

「君毎日これだ。これからは何か買はふと云ふと

所天の竈ですかで御流れさへ、」

「僕もうかくして飯焚候補者に見立られると大
變まづ今日は之で御免蒙らふ君之にこりて突飛

な改良はよし給へ奥さんもあまりいぢめないで
下さい竈はかけがいがいくらも買えますが旦那
様いぢめこはしては取返しがつきませんから、

まわく」

又しても一座の笑聲をさく歸路につきけり

* * * * *

改良竈には特許を得たるもの既に數十種ありて

何れも相當の特長を持てる中にも一般に經濟的

なるは何れの竈にも共通の利益なりと聞き居りしに

此山石竈は時間に於ても燃料に於ても少しも經濟

なる點はなく搗へ加へて焚き始めより終り迄付

き限りに傍にありて世話をせざれば一向に燃えず

一旦燃え付きたる薪も眞黒くなりて消ゆるを常と

し、唯善く燃ゆるは木葉のみなりと云ふ。誠に不

思議なる竈と云ふの外なし、而も商店は他品との

交換も受引かず、始めの誓言にも背き言を左右に

して引き取りもせずとは何たる不徳漢にや夫れに
しても、實用新案第一七八六號と名の打ちあは

果して實際の特許なるにや將た山師の世人を眩ま
さん手術にや今後改良竈を買はん人は注意す可き
ことならずや。

▲日本人は何故短少なるか 支那人の内で相當の教
育があるものでも事理が解せぬには困る奉天將軍の
許に或る州の知事から意見書を奉つた其中に斯う云
ふ事が書てある森林を早く伐採せぬと人間の丈行が
少くなる何故かと云ふと森林の中には虎の如き猛
獸が居るが爲めに之を人間が懼れて其度ひに膽が少
くなる膽が少くなると身の丈げも短くなる日本には
森林が多いから日本人は身の丈げが少いではないか
と云ふ結論の意見書であつた(奉天省農林學校教師
三戸章造氏の談話)

割 烹

石井泰次郎

中皿 菊冬瓜
ふじまめ 新生姜

いなは、鱗をよく去り、背の方より開き、はらわ
たを取り去り、骨も取り去りて、水にて洗ひ、薄
鹽をわてて少しの間置き、又ざつと洗ひて、腹の
所へ、煉味噌をつめ、二つに合せて、蒸籠に入れ
てむし、あたゝかさうち器にもりて出すべし。
煉味噌は、味噌を去りて、うらごしになし、鍋
に入れ、砂糖 みりん、水等を加へ、木杓子に、
てよく煉りたるものなり。かたさかげんに煉り
冷して魚に詰むるべし、

冬瓜は洗ひて、堅切に一寸四分幅に切つて、其一
切の兩端の曲りたる所を切り去りて、上の皮を厚